魔法少女まどか☆マギカ　聖なる焔と新たなる運命

緋月ルナ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「僕と契約して魔法少女になってよ！」

見滝原中学校の２年生、鹿目まどかは謎の生物、キュゥべえに出会う。

そこに異世界、オールドラントから来たと言う赤髪の青年ルーク・フォン・ファブレ、平行世界から来たと言う神崎澪鵺が現れる。

彼らはまどか達に共に魔女を倒そうと共闘を持ち掛ける。

その提案に乗り、まどか、さやか、マミは魔女退治を始めるのだった。

彼らが出会う時、物語は新たなる運命を刻み始める――――

目次

マギカ編
第1話　魔法少女 ―― 1
第2話　異世界からの来訪者 ―― 14
第3話　平和な日常 ―― 28
第4話　新たなる魔法少女 ―― 40
第5話　赤の魔法少女 ―― 54
第6話　対決 ―― 67
第7話　真実 ―― 82
第8話　絶望を切り開く力 ―― 99

マギカ編

第1話　魔法少女

魔法少女まどか☆マギカ　聖なる焔と新たなる運命

「う…ん……痛ってえ…」

痛む頭を抑えて赤髪の男。ルーク・フォン・ファブレは起きあがる。

「ここは…？確か俺は…」

周囲を見回すが、見慣れない景色だ。

バチカルの廃工場のようにも見えたが、少し違う。

「おーい！ティア！ガイ！ジェイド！」

仲間達の名前を呼ぶが返事はない。

「くそっ…何なんだよ…」

ルークはイラつきながら出口を探して歩きだす。

当たりは薄暗く、たまにある窓から光が差しているだけだ。

見知らぬ場所にいる事に不安を覚える。

その時――――

――――ガタッ

物音に振り向くと、そこには黒い衣装に身を包んだ男が立っていたのだ――――

「はぁ…！はぁ…！」

ピンク髪の少女、鹿目まどかは怪我をした白い生き物を抱えて、走っていた。

だが、途中から周りの景色が変貌し、『それ』は彼女達を囲んでしまう。

「冗談だよね…？あたし、悪い夢でも見てるんだよね!?ねえ、まどか！」

青髪の少女、美樹さやかが叫ぶ。

だが、ハサミの化け物は彼女達をじりじりと追い詰めていく。

（もう…ダメ…）

そう思った瞬間――――

「危なかったわね」

自分達の立っていた床が輝き、ハサミの化け物は消滅する。

「でも、もう大丈夫」
　そう声が聞こえ、振り返ると金髪をスパイラル状にカールさせた少女が彼女達に向かって歩いてきていた。
「あら、キュゥべえを助けてくれたのね？ありがとう。その子は私の大切な友達なの」
「私、呼ばれたんです。頭の中に直接この子の声が」
「ふぅん？なるほどね。その制服、あなた達も見滝原の生徒みたいね？二年生？」
　まどかの言葉に何か納得したように
「あの…あなたは…」
「そうそう、自己紹介しないとね。でも…その前に…」
　さやかは訪ねるが、自分達の周囲に鎖が展開される。

「ちょっと一仕事片付けちゃっていいかしら？」
　そう言うと金髪の少女は金色の卵のような物を掲げると、彼女は光に包まれ制服から、ブラウスとスカートにベレー帽やコルセットを組み合わせたクラシカルな服装へと変わる。
　そのまま彼女は飛び上がると、自信の周囲に無数のマスケット銃を展開し、それを一斉に放つ。

無数の弾丸はハサミの化け物へと降り注ぐ。
「す、すごい…」
まどかはその姿を見て感嘆の声を漏らす。
すると、周囲の景色が元に戻っていく。
「も、戻った…！」
だが、彼女達の目の前に黒と白を基調とした少女が現れる。
金髪の少女は彼女に
「魔女は逃げたわ。仕留めたいなら、すぐに追いかけなさい。今回はあなたに譲ってあげる」
「私が用があるのは…」
「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの」
声のトーンを落とした彼女の声に空気がビリビリと震え、その緊張感はまどかやさやかにも伝わる。
「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」
「……」
黒髪の少女は踵（きびす）を返すと、その場から姿を消す。
『ほっ…』

まどかとさやかは安心し、安堵の息をつく。

―

―

―――

―――――

その後、彼女達はキュゥべえと呼ばれた生き物の治療をしていた。
金髪の少女――巴マミがキュゥべえに光を当てると、その生き物は目を開く。
「ありがとう、マミ。助かったよ」
「お礼はこの子達に。私は通りかかっただけだから」
「どうもありがとう。僕の名前はキュゥべえ」
キュゥべえはまどか達の方を向くと、彼女達に礼を言う。
「あなたが私を呼んだの？」
「そうだよ、鹿目まどか。それと美樹さやか」

「どうしてあたし達の名前を？」
当然の疑問にさやかは狼狽えつつ、尋ねる。
だが、キュゥべえはそれに答えず、続ける。
「僕は君たちにお願いがあって来たんだ」
「お、お願い？」
「僕と契約して魔法少女になってほしいんだ」

次の日――――――

「んぅ…？」
まどかは妙な夢から目が覚める。
「はぁ…また変な夢ぇ…。ん？」
枕を抱えると彼女は何かに気付き、ぬいぐるみを置いてある棚をみる。
そこには

「おはよう。まどか」
キュゥべえが座っていた。
「はは…」
それを見てまどかは苦笑いを浮かべるのだった。
そして、昨日の事を思い出す。

その晩、まどかとさやかはマミの部屋に呼ばれていた。
「マミさん、すっごく美味しいです！」
「めちゃウマっすよ！」
「良かったお口にあって」
ケーキと紅茶を楽しみつつ、マミが説明をする。
「キュゥべえに選ばれた以上あなた達はもう他人事じゃないものね。ある程度の説明は必要かと思って」
「うんうん、何でも訊いてくれたまえ」
「さやかちゃんそれ逆…」
まどかは苦笑いするが、マミはクスクスと笑うと金色の宝石をとりだす。
「わぁ…綺麗…」

「これがソウルジェム。キュゥべぇに選ばれた女の子が契約によって生み出す宝石よ。魔力の源であり魔法少女のあることの証でもあるの」
「契約って？」
「僕は君達の願い事を何でも叶えてあげる。でも、それと引き替えに出来上がるのがソウルジェム。この石を手にした者は魔女と戦う使命を課されるんだ」
「魔女って何なの？魔法少女とは違うの？」
　さやかが尋ねると、キュゥべぇは答える。
「願いから生まれるのが魔法少女だとすれば魔女は呪いから生まれた存在なんだ。魔法少女が希望を振り撒くように魔女は絶望を撒き散らす。しかもその姿は普通の人間には見えないから質が悪い。不安や猜疑心…過剰な怒りや憎しみ。そういう災いの種を世界にもたらしているんだ」
　キュゥべぇの説明に付け足し、マミが口を開く。
「理由のはっきりしない自殺や殺人事件はかなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ。形の無い悪意となって人間を内側から蝕んでいくの」
「そんなヤバい奴らがいるのに、どうして誰も気付かないの？」
「魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね。さっき君達が迷い込んだ迷路のような場所がそうだよ」

「結構危ないところだったのよ？あれに飲み込まれた人間は普通は生きて帰れないから…」
「マミさんは、そんな怖いものと戦っているんですか？」
「そう、命がけよ。だから、あなた達も慎重に選んだ方がいいわ。キュゥべえに選ばれたあなた達にはどんな願いでも叶えられるチャンスがある。でも、それは死と隣り合わせなの」
「ふぇ…」
「…悩むなぁ」
「そこで、提案なのだけど、２人共しばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」
『え!?』
　マミのまさかの提案に２人は耳を疑う。
「魔女との戦いがどういうものか、その目で確かめてみればいいわ。その上で危険を犯してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの」
（マミさんはそう言ってたけど…大丈夫かな…）

　その日の放課後、まどかとさやかはマミの魔女退治について行っていた。

「今日こそ逃がさないわよ」
　マミはそう呟くと、さやかの持っていたバットを掴み、その形を変化させる。
「うわ…うわわ…」
「すごい…」
「気休めだけど、これで身を守る程度の役には立つわ。絶対に私の傍を離れないでね」
　そう言い、マミは魔女の結界へと飛び込む。
『はい！』
　その後にまどかとさやかも続く。
　結界に入ると、螺旋階段を彼女達は使い魔を撃退しつつ登っていく。
「来んな…来んな！」
「どう…？怖い？２人共」
　バットを振り回すさやかを見て、マミは聞く。
「な、なんてことねえって！」
　たが、さやかは強がってみせる。
（怖いけど…でも…）
　まどかの目にはマミの姿は輝いて見えていた。
　自分もこうなりたいと、そう感じていた。

「頑張って！もうすぐ結界の最深部だ！」
しばらく走ると、キュウべえがそう教えてくれる。
そして、目の前に、扉が現れる。
その中に入ると、今までのどれよりも禍々しいそれが待ち構えていた。
「見て。あれが『魔女』よ」
「あんなのと…戦うんですか？」
「大丈夫。負けるもんですか。下がってて！」
そう言い残すと、マミは飛び降り、魔女に向けてマスケット銃を乱射する。
だが、魔女はマミを捕まえると壁に叩きつけ、さらに逆さにして宙吊りにする。
それでも、マミは余裕の表情を絶やさない。
「マミさん！」
「大丈夫。未来の後輩にあんまり格好悪い姿は見せられないものね！」
そして、魔女の拘束を解くとマミは巨大な銃を召喚する。
「ティロ・フィナーレ!!!!」
その巨大な銃から放たれた光は魔女を吹き飛ばして消滅する。
魔女を失った結界は形を崩し、元の景色へと戻っていく。
「か、勝ったの…？」

「すごい…」
　マミは微笑むと目の前に転がった黒いものを拾う。
「これはグリーフシード。魔女の卵よ」
「た、卵…」
「運が良ければ、時々魔女が持ち歩いてることがあるの」
「大丈夫。その状態では安全だよ。むしろ役に立つ貴重なものだ」
　そうキュゥべえは説明する。
「私のソウルジェム、昨夜よりちょっと色が濁ってるでしょ？」
「そういえば…」
　マミに言われてソウルジェムを見ると、確かに少し色が濁っていた。
「でも、グリーフシードを使えば…」
「ほら」
「あ…綺麗になった」
「ね？これで消耗した私の魔力も元通り。前に話した魔力退治の見返りっていうのがこれ」
　マミはそう言うと、グリーフシードを投げてしまう。
「あ…」

「あと1度くらいは使えるはずよ？あなたにあげるわ暁美ほむらさん」
視線の先には、昨夜の魔法少女であると同時に、転校生である彼女がいた。
「あいつ…」
「それとも、他人と分け合うのは不服かしら」
「あなたの獲物よ。あなただけの物にすればいい」
ほむらは手に持ったグリーフシードをマミに投げ返す。
「そう。それがあなたの答えね」
そのままほむらは踵を返して姿を消してしまう。
「くぅぅぅ…！感じ悪い奴！」
「仲良く出来ればいいのに…」
「お互いにそう思えれば、ね…」

第２話　異世界からの来訪者

あれから、数日――――

「よっ、お待たせ」

「あれ？上条くん、会えなかったの？」

「なんか今日は都合が悪いみたいでさー。わざわざ来てやったのに、失礼しちゃうわよねー」

今日、まどかとさやかはさやかの幼馴染みである上条恭介の見舞いに来ていた。だが、どうやら会えなかったようだ。

「それじゃ、マミさんの所に行こっか」

今日は恭介の見舞いの後にマミと会う約束をしていた。

少し早くなったが、大丈夫だろうと彼女達は歩みを進める。

すると、駐輪場でまどかが何かを見つけ、足を止める。

「あ…」

「ん？どしたの？」

「あそこ…何か…」

さやかも気になり、見るとそこには…
「グリーフシードだ！孵化しかかってる！」
キュゥべえがその存在に気付き、叫ぶように声を上げる。
「嘘…何でこんなところに…!?」
「マズいよ、早く逃げないと！もうすぐ結界が出来上がる！」
「またあの迷路が…」
「まどか、マミさんの携帯聞いてる？」
「え？ううん…」
さやかは聞くが、まどかは首を振る。
「まずったな…。まどか、先に行ってマミさん呼んできて。あたしはこいつを見張ってる」
「無茶だよ！マミの助けが間に合うかどうか…」
「あの迷路が出来上がったらこいつの居所も分からなくなるんでしょ！放っておけないよ…こんな場所で…」
さやかの叫びにキュゥべえは少し考え、
「…わかった」
決意したようにまどかを見据え、言う。

「まどか、先に行ってくれ！さやかには僕がついてる！」
「ありがとう…キュゥべえ…」
自分についていてくれると言ったキュゥべえにさやかはお礼を言い、まどかは
「わかった…すぐにマミさんを連れてくるから！」
そう言い残して走って行くのだった。

数分後、すぐにまどかはマミを連れて戻って来た。
「マミさん…！」
「これね…今日という今日は速攻で片付けるわ！」
そのまま魔法少女へと変身して結界の中へと飛び込む。
同じく、まどかとさやかも後に続く。
だが、
「今回の獲物は私が狩る。あなた達は手を引いて」
結界に入ると、ほむらが既にいた。
ほむらはこの魔女を自分が退治すると言う。

だが、マミも引くわけにはいかないとばかりに、
「もう二度と会いたくないと言ったはずよ?」
マミはほむらを睨みつけ、身構える。
「邪魔するというのなら…」
そのままリボンを召喚し、ほむらを拘束する。
「なっ…こんな事をしてる場合じゃ…!」
「大人しくしてたら解放してあげるわ」
「待っ…」
ほむらの言葉に耳を貸さず、マミはまどかとさやかを連れて奥に行ってしまう。
この後、どうなるのかも知らずに…

「こいつね…」
孵化した魔女はすぐに見つかった。
その容姿はキャンディのような頭に顔を付け、マントを羽織ったようなものだ。
それに向かってマミは周囲に召喚したマスケット銃を乱射していく。
魔女はただただ抵抗なく銃弾を受け続ける。

「せっかくの所、悪いけど…」
落ちてきた魔女をマスケット銃をバット代わりに振るい、吹き飛ばす。
「これで…終わりよ！ティロ・フィナーレ！」
いつもの巨大な大砲のような銃を召喚して魔女を撃ち抜く。
だが――――

『グオオオオオア…』

「えっ…？」
魔女の中からピエロと芋虫を掛け合わせたような魔女が現れ、マミを食べようと大きく口を開ける。
「マミさん…！」
さやかは叫ぶが、足が竦んで動けない。
（こんなところで…私は…）

死ぬのか…。
そう、思った瞬間――――

「――――バレットレイン！」
上空から降り注いだ無数の光の弾丸が魔女を撃ち抜く。
「これでも喰らいな…！烈破掌！」
追い討ちをかけるように赤い髪の青年が魔女を吹き飛ばす。
自分の置かれた状況が把握できずにマミは立ち尽くしてしまう。
「おい！ボサッとすんな！死ぬぞ！」
「え？ええ…っ」
我に返り、マミは魔女から距離をとる。
あれだけの攻撃を受けたというのに、まだ魔女は動けるようだ。
そして、さっきの攻撃を行った人物であろう2人の男が魔女に向かって立っている。
1人は黒いマントを羽織った赤い長髪の青年で左手に変わった形の剣を握っている。
もう1人は黒いロングコートに身を包み、自身の周囲に黒いライフルを展開してい

た。その手には2挺の同型のライフルを持っている。
「まったく…何か妙な反応があると思えばこれか」
　黒いコートの男はそう呟くと魔女を見て手に持つライフルを魔女に向ける。
「ルーク！お前は左から！俺は右からやる！」
「わかったぜ！」
　黒いコートの男が合図すると2人は左右に走り、それぞれ攻撃を加えていく。
「あの人達は…？」
「わからない…でも、敵ではなさそう」
　まどかの問いにさやかは答える。
　最低でも、彼らは『魔法少女』ではない。
　だが、魔女が見え、戦えるということは普通の人間ではないようだ。
「これで決めるぞ…！ルーク、離れてろ！」
「ああ！」
　ルークと呼ばれた赤髪の青年は素早い身のこなしで魔女から距離をとる。
　それを確認し、黒いコートの男は自ら持っている2挺のライフルを直列に接続し、周囲にライフルを展開する。
「消し飛べ…ファントムブレイカー！」

手に持ったライフルと周囲のライフルから放たれた光が収束し、巨大なビームとなって魔女を跡形もなく消し飛ばす。
「つ、強い…」
その圧倒的な強さにさやかはただ、そう呟いた。
マミもだが、彼らはその更に上を行く強さだ。

「…終わったか」

黒いコートの男はライフルを消すとまどか達を見る。
「危ない所だったな。怪我は？」
「あ、あなたは…」
「説明は後だ」
彼らの事を尋ねようとするが、そう切り捨てられる。
それに続けて、後ろからほむらも姿を現す。
「生きていたのね」
「彼らが助けてくれたのよ」
「そう。それで？あなた達は何者なのかしら？」

「その話は後にしてくれないか?この格好だと目立つからな。どこか落ち着ける場所があればゆっくり説明するからさ」
ルークはほむらを見て苦笑いする。
彼は腰に剣を提げ、白い服の上に黒いマントを羽織っている。
確かにこれは目立つ
「わかったわ。なら、私の家にしましょ」
そうマミは提案し、そのままマミの家に行く事となった。

マミ宅
「ここなら誰も来ないから心配ないわ」
マミのマンションに行くと、人数分のケーキと紅茶を用意して彼女は2人を見る。
「助けてもらった身で悪いのだけど、どうして魔女が見えるのか。どうして魔女と戦えるのか。そしてあなた達が何者なのか。説明してくれるかしら?」
「そのことだが…」

コートの男が言いづらそうに呟く。
「どうやら、俺達は別の世界から飛ばされてきたようなんだ」
そう言い放つ。
「別の世界!?なにそれ!?」
その言葉を聞き、さやかは掴みかかるように聞く。
「落ち着けって。俺達からしちゃ、あんなものも信じられないんだからさ」
ルークは仲裁するように2人の間に割って入る。
あんなもの、とは魔法少女や魔女の結界のことだろう。
「澪鵺の言ってる事は本当だ。正直、まだ混乱してる。いきなり訳の分からない場所に飛ばさるし、仲間はいなくなってるし、周りには元の世界とは全然違う景色が広がっているし」
そうルークが眉をしかめて言う。
そして何か思い出したようにまどか達を見る。
「自己紹介がまだだったな。俺はルーク。ルーク・フォン・ファブレ。オールドラントっていう世界から来た」
まずは自分が自己紹介して次はお前だとコートの男に振る。
「俺は神崎澪鵺（かんざき　れいや）。ここことは別の時間軸の地球から来た。所謂パラレ

ルワールドというものだ。元の世界では独立武装組織Ａ．Ｒ．Ｍ．Ｓ．（アームズ）の最高司令官をしている」

澪鵺と名乗った男はポケットから端末を取り出し、彼女達に見せる。

そこには彼の名前と写真、所属している組織であるだろう名前が表示されていた。

「こ、これを見せられたら否定はできないわね」

それを見たさやかは身を引いて彼らを見る。

だが、それでも分からない事があった。

「それが本当として、どうしてあなた達に魔女が見えるのかしら？あれは普通の人間には見えないはずよ」

マミは一番の疑問である事を聞く。

別の世界から来た事が本当として、どうして魔女が彼らには見えるのか。

「それは恐らく、この世界に存在する魔力のようなものに反応して見えているんだろう。俺たちの世界にも似たようなものがあるからな」

「俺たちはそれぞれ別の世界から来たんだけど、共通することがあったんだ」

「共通すること…ですか？」

まどかの問いに頷き、澪鵺は続ける。

「そう。それは互いの世界に魔力のようなものがあって、それを元に存在する『魔物』が

いるんだ」
「ま、魔物!?」
さやかはその単語に驚き、続けて聞く。
「魔物ってゲームとかアニメとかでよくある人間を食べるっていうあれ!?」
「まぁ、そんなところだ。魔物は無差別に人を襲う。それに対抗するための組織が俺のA・R・M・S・だ」
「すっごい…途方もない話じゃん…」
「あとは…俺達にもその『魔法少女』が何だか教えてくれないか?ずっと俺たちの事ばかり話してる気がするからな」
「あ…ごめんなさい」
ほむらは自分たちが聞いてばかりなのに気付き、謝る。
そして、彼女は魔法少女の事について話した。

「…なるほど。魔法少女は希望を生み、魔女は絶望を生む、か」
「そういうことよ。そして、魔女はさっきも言った通り、普通の人間には見えない」
「…ルーク」
「ああ、わかってる」

「ならば、俺達もその魔女退治とやらに協力しよう」
　ほむらからの説明を聞き、彼らの口から信じられない言葉が聞こえ、彼女達は耳を疑った。
『え!?』
「生活する場所さえ用意してくれたら協力しよう。戦力は多いに越した事はないだろう？」
「確かにそうだけれど…」
「それに…君達はまだ子供だ。協力ついでに訓練してやってもいい」
「本当…!?」
　それを聞いたマミは喜びに身を乗り出す。
　今日の事で痛感した。自分の詰めの甘さを。彼らが来てくれなければ、まどかとさやかが危険な目に遭っていた。
　それに、澪鵺なら自分と似た戦い方をしてる。
　なら、戦い方について効果的に教えてくれるかもしれない。
「なら、うちはどうかしら？一人暮らしだし、部屋も空いてるわ」
「いいのか？」
「もちろんよ」

「では、有り難く」

第３話　平和な日常

次の日――――

「さて、まずはルークの服装だな」
　食事を終え、澪鵺が唐突に言う。
「え？俺？」
　ルークは訳が分からないと言わんばかりに首を傾げる。
「お前…その服装だと目立つだろう。自分でも言ってたろ」
「あー…そうだったな。でも、どうするんだ？」
「まぁ、任せておけ。俺に考えがある」
「その考えとは何かしら？」
　マミがテーブルに紅茶を出しながら質問する。
　澪鵺は紅茶を少し飲むと笑みを浮かべ、
「マミ達魔法少女の変身を利用する」
「…はい？」

突拍子もない発言にルークは更に微妙な表情をして澪鵺を見る。
魔法少女の変身を利用する？
どういうことだ。とルークは思っていた。
だが、澪鵺は気にせずに続ける。
「まぁ、そのうち分かる。マミ。まどか達と合流するぞ」
「わかったわ。連絡するから少し待ってて」
そう言ってマミは自分の部屋へと戻っていく。
昨日の一件があり、すぐに彼女達と連絡先を交換したのだ。
少し待っているとすぐにマミはリビングに戻ってきた。
「連絡しておいたわ。1時間後に来るらしいわよ」
「そうか。ありがとう」

1時間後、まどかはさやかを連れてマミの家にやってきた。
「澪鵺さん、どうしたの？」

「まぁ、少し買い物に付き合ってほしいんだ」
「買い物、ですか？」
「ああ。俺はまだしも、ルークの服装は目立つからな。この際、お前達と似たような事をしようと思ってな」
「どういうこと？」
「まぁ、それは後からのお楽しみだ」
「はぁ…」
「とにかく上着だけでもこれに変えておけ」
そう言いながら自身のコートを渡す。
「あと、剣は俺が預かっておく」
さらに澪鵺はルークからローレライの鍵を受け取り、その手から消してみせる。
「なにそれ!?すごい！」
さやかは目の前で剣が消えた事に驚き、澪鵺の手を掴む。
こういう事が好きなのか、さやかは興味津々だ。
「どうやったの!?」
「あー…簡単に説明すると、剣を粒子に分解して一時的に自分の体内に吸収しているんだ」

「んぅ？」
「そうだな。俺の世界の人間は少なからずこの世界の魔力源に似た粒子を体内に含んでいる。その粒子にさっきの剣を分解することで自分と融合させているんだ」
　まどかの表情を見て説明した澪鵺に、さやかは「なるほど」と頷き
「さっぱり分からん！」
　そう言い放つ。
「だろうな…」
　苦笑いする澪鵺にマミは続けて質問する。
「澪鵺さんの世界では皆そういう事が出来るのかしら？」
「ん？いや、1人同じ事を出来る奴はいたが、それは自分の持つ粒子分解融合―クロス・コンタミネーションという能力―スキル―で行っているからな。皆が皆同じ事が出来る訳じゃないんだ」
　そう説明した澪鵺にさやかも同じく尋ねる。
「んじゃあ、澪鵺さんはどうしてそんな事が出来るの？」
「まぁ、これは俺の能力の応用みたいなものだ。物質の内部に電流を流して構造を把握、分解、再構築することで自身に取り込んでいる。だから自身に取り込める物質は1つまでという限度はあるし、能力で元々そういう事が出来る人間には劣るんだ」

「へぇ…そうなんだ」
　澪鵺の言う能力とは、澪鵺のいた世界で一部の人間が使える超能力のようなものでレベル1～5というランクに分けられ、レベルが高くなるほど強力なものになると昨日、説明されていた。
　そして、彼自身も能力者であり、その能力は電撃系統の能力だとか。
「俺の武器もこれを応用しているんだ」
「あ、そういや魔女を倒した後に消えてたもんね」
　昨日の魔女との戦いの時の事を思い出してさやかは納得する。
　確かに、澪鵺は魔女を倒した後に持っていたライフルと展開していたライフルをその場から消していた。
　あれがどうして消えたのか、最初はマミと同じ召喚魔法か何かかと思っていたが、違ったようだ。
　そんな事を話していると、
「俺の仲間にも同じ事が出来る奴がいたぜ」
　コートに着替えたルークが後ろから話しかける。
「ジェイド・カーティスっていう奴なんだけど、そいつも槍を音素―フォニム―に分解して自分の腕に融合させてた。まぁ、ジェイドの場合は体内じゃなくて腕の表面だったけ

ど」
　彼の言う音素もこの世界の魔力や澪鵺の世界の粒子というものと同じ存在だ。
　ただし、音素は第1（ファースト）～第7音素（セブンスフォニム）に分けられ、それぞれの属性を持っているという違いはあるらしいが。
「確かジェイドもコンタミネーション現象を利用してるとか言ってたな」
「そっちの世界にも同じような事が出来る奴がいたんだな」
「まぁ、あの人は天才とか言われてる人だからな。…陰険鬼畜眼鏡だけど」
「陰険…？」
「ああ、いや、忘れてくれ！何でもないから！」
　ルークはまどかに慌てたように手を振って否定する。
　どうやら、色々と訳ありなようだ。
「ふふ…。さ、そろそろ出かけましょ？」
「ああ、そうだな」

「ねえ、これとかいいんじゃない？」
「これもいい感じですよ」
「私はこれがいいんじゃないかと思うわ」
　近くのデパートに入り、まどか達は楽しんでルークの服を選んでいた。
（楽しそうだな）
　澪鵺はそんな彼女達を見て、娘を見ているような感覚になる。
（…那月）
　彼は元の世界に残してきた自分の息子の事を思い浮かべる。
　彼の息子である那月（なつき）はＡ．Ｒ．Ｍ．Ｓ．専属学校アカデミーの２年生で１７歳だ。ついでに言えば、アカデミーの中でもかなりの実力者でもある。
　それでも親としてはやはり、自分の子供が心配なのだろう。
（ま、あいつなら何とかやっているか）
　自分の頬を少し叩き、まどか達に近寄る。
「決まったのか？」
「決まったよー！」
　澪鵺の問いにさやかが元気に答え、楽しそうに自分達の選んだものを見せる。
「じゃーん！」

彼女達が選んだのは黒いジーンズに黒いシャツと白のジャケットだった。
かなり落ち着いたデザインで選んでいたようだ。
「ほう？いいんじゃないか」
「元の服装とほとんど同じ色分けなんだけど…」
ルークは苦笑いするが、まどか達は満足げだ。
「よし、じゃあ次は澪鵺さんね」
「え？俺は別に…」
マミの言葉に少し驚き、澪鵺は後ずさる。
まさか自分の物まで選ぶ事は予測してなかったのか、さすがの澪鵺でも驚いた。
「ほら、１人だけゴツゴツした服装だと不自然じゃない？だから、ね」
「さぁ、覚悟したまえ！」
「ちょっ…待て！」
澪鵺は更に後ずさるが、両腕をマミとさやかに掴まれる。
どうやら、抵抗は無駄なようだ。
そう察した澪鵺は諦め、連行されていってしまう。
「２人とも楽しそう」
彼女達の楽しげな表情を見て苦笑いするまどかだが、別に嫌ではない。

むしろ楽しいならそれでいいとも思えていた。

「なぁ…本当に良かったのか？」
帰り、ルークはマンションの通路を歩きながら澪鵺に聞く。
「ああ。幸い、俺の元いた世界と同じ通貨だったからな」
今回の買い物は澪鵺が全て払ってくれていた。
澪鵺の元いた世界と同じ通貨だったということで、彼が全て支払うと申し出てくれたのだ。
「でも、何でアクセサリーも必要なんだ？」
ルークは手荷物を見つつ、聞く。
なぜなら、服だけではなく、アクセサリーも買っていたからだ。
別にアクセサリーは何でも良かったので指輪にしたわけだが。
「それは帰ったら分かる」

澪鵺はそう言い、マミの部屋の前に立つ。
「ほら、着いたぞ」
マミが扉を開けるのを待ち、部屋に入る。
「私達までいっぱい買っちゃったね。それで、これからどうするんですか？」
自分たちの荷物を床に置き、まどかは聞く。
当初はルークの物だけを買う予定だったのだが、ついつい、ショッピングと言うこともあり自分達のものまで買ってしまったのだ。
「ん？まぁ、少し待っててくれ」
そう言って澪鵺はルークを連れて自分たちの部屋へと入っていってしまう。
『??』
どういうことか分からないまどか達は顔を見合わせる。
だが、すぐに2人は戻ってきた。
2人は先ほど買った服を着ている。
「さて、やるか」
澪鵺は元々着ていた服と買った指輪を準備すると服を粒子に分解してしまう。
「な、何してんの!?」
「これを、こうして…」

次に指輪を取ると粒子を指輪に纏わせる。
蒼白く輝く粒子は光を失うと、その形は元の形とは違い、黒い石が嵌まった指輪となっていた。
「え…ええ？」
「これで終わりだ」
「ほんとに…どういうこと…」
澪鵺が何をしたのか理解出来ないさやかはその場で頭を抱える。
それを見た澪鵺は説明しようと口を開く。
「朝、説明したコンタミネーションを利用したものだ。さっきの服を一度粒子に分解して指輪に融合させた。これで俺が念じれば今まで通りの服装に戻れるってわけだ」
「へぇー。魔法少女みたいですね」
まどかが目を輝かせる。
どうやら、こういうものが好きなのだろう。
「まぁ、魔法少女の変身を参考にしたのもあるんだがな」
そう言ってマミを見る。
そして、続きだとばかりに
「さ、次はルークだ」

ルークの服と剣を自分と同じように指輪へと融合させるのであった――――

第４話　新たなる魔法少女

さやかＳｉｄｅ

「素敵な曲だよね」

放課後、さやかは恭介の見舞いに来ていた。

そして、恭介は音楽を聴きながら外の景色を見ている。

「ほら、あたしってクラシックなんて聴くガラじゃないだろって。曲名とか言い当てると驚かれるんだよね」

さやかは笑顔で話す。

だが…

「さやかは、さ…」

恭介はイヤホンを外し、さやかに冷たい視線を向ける。

「…な、なに？」

「…僕をイジメてるのかい？」

「えっ…」

恭介の言葉に驚き、動揺してしまう。

自分にそんなつもりなどないのに、恭介がそう感じているとも思っていなかったからだ。

この間まで笑顔で音楽を聴いていたのに、何故。さやかの頭の中でそれだけがグルグルと回っていた。

「何でまだ僕に音楽を聴かせるんだ？嫌がらせのつもりなのか？」

「だって恭介、音楽好きだから…」

「もう聴きたくなんかないんだよ！自分で弾けもしない曲！ただ聴いてるだけなんて！」

恭介は頭を押さえ、目を閉じる。

そして

「僕は…僕は…！」

苦痛に叫んだ恭介は音楽プレイヤーを叩き割ってしまう。破片で傷ついた手から血がベッドに飛び散る。

「っ…！」

「動かないんだ…もう…痛みさえ感じない…こんな手なんて…」

「大丈夫だよ…諦めなければ…いつか…！」

「諦めろって言われたのさ。もう演奏は諦めろってさ。先生に直々に言われたよ。今の

医学じゃ無理だって」
「…っ」
「奇跡か魔法でもない限り…もう治らない…」
その言葉にただ１つ、彼女の脳裏に思い浮かんだ事があった。
「あるよ」
「えっ…」
「奇跡も魔法も、あるんだよ！」
覚悟を決めたさやかは恭介にそう叫ぶのだった――――

まどかＳｉｄｅ

「あ、仁美ちゃん」
学校からの帰り道、親友である志筑仁美を見つけて声をかけながら駆け寄る。
「仁美ちゃーん！」

まどかが近寄ると、その首に何やら模様が見て取れた。
それは…
「あ、あれは…魔女の…」
そう、魔女の口付けと呼ばれるものだった。
それに気付いたまどかは慌てて近寄り、その肩を掴む。
「ねえ、仁美ちゃん！仁美ちゃんってば！」
「あら、鹿目さん。ごきげんよう」
やっとまどかに気付いた仁美が笑顔で挨拶する。
だが、まどかにそんな余裕などどこにもなかった。
「ねえ、どこ行こうとしてたの!?」
「どこって…ここよりも素晴らしい場所ですわ」
フフ…と笑顔で答える。
そして、思いついたように手をパンッと合わせて
「そうですわ。鹿目さんも一緒に行きましょう。それがいいですわ」
そう提案し、そのまま歩いて行ってしまう。
（ど、どうしよう…）
周りを見渡し、どうすればいいか考え、

（そ、そうだ…マミさん達に…！）
今はマミ達しか頼れる人がいない。
ほむらの携帯番号は知らない為、まどかは慌ててマミに電話をかける。
「ま、マミさん！仁美ちゃんに…仁美ちゃんに魔女の口付けが！」
『わかったわ！すぐに行くから！そのまま繋いでいて！どこに行こうとしているか案内してちょうだい！』
電話に出たマミにそう伝えると、電話を繋いだまま案内するように言われ、
「は、はい！」
まどかは仁美の背中を追いかけていく――――

その後、着いたのは街外れの廃工場だった。
そこには何人もの人が集まり、その中の１人がバケツに何かの薬剤を流し込んでいた。
「そ、それはダメ…！」
「邪魔してはいけませんわ。あれは神聖な儀式ですもの」

危険な薬剤であると気付き、止めに入ろうとするが、仁美に止められてしまう。
「離して！」
だが、まどかはその手を振り払うとバケツを奪って窓の近くにまで走り、そのままバケツを窓から外に放り投げる。
「はぁ…っ！はぁ…」
薬剤を投げ捨て、安心するまどかだが、その後ろから魔女の口付けを受けた人達がゾンビのように襲いかかってきた。
「ど、どうしよう…！」
慌てて別の部屋に逃げ込むが、そこに魔女が襲いかかり、まどかを結界の中へと飲み込んでしまう。
そこには旧型のＰＣに羽が生えたような魔女がいた。
「や、やだ…そんな…！」
魔法少女でもない彼女には魔女に対抗する手段もなく、今はマミもルークも澪鵺もいない。
このまま死ぬのかと思うと恐怖で動けなくなる。
「だ、誰か助けて…！マミさぁぁぁん！」

「マミさんじゃないけど！助けるよ！」

聞き覚えのある声がすると思うと、誰かが上空から飛び降りてきて魔女に斬撃を与える。

その人物は

「さやかちゃん!?」

そう、美樹さやかその人だった。

「さやかちゃん登場！さて、まどかを狙う魔女は、あたしが倒ーす！」

青と白の甲冑のような服とスカートに身を包み、ルークとは対照的な白いマントを羽織っている。そして彼女は手に持った剣を魔女に向ける。

だが、さらに

「『あたし』じゃなくて」

「『達』、だろ？」

そう言って現れたのは

「マミさん、ルークさんに澪鵺さん！」

その3人だった。
「遅くなったな。怪我はないか?」
「はい、大丈夫です」
差し出された手を掴み、まどかは立ち上がる。
見ればマミは当然、魔法少女に。ルークと澪鵺はそれぞれ自分の衣装に変わっていた。
それに、気付けば周囲はメリーゴーランドのような景色に変化している。
「さて、一気に仕留めるぞ」
そう澪鵺が言うと両手に付けた指輪が輝き、2本の剣に姿を変える。
1本は黒い刀身に赤い紋様が刻まれた剣。もう1本は同じく黒い刀身だが、刃の部分が蒼白く、淡く光っている。
「はぁっ…!」
そして地面を蹴って飛び上がり、使い魔を踏み台にして魔女の元へと駆け上がっていく。
「あ、待てって!」
「あ、あたしも!」
その後にローレライの鍵を引き抜いたルークとさやかも続く。

対してマミは
「私はここからサポートしようかしら?」
自分の周囲に大量のマスケット銃を召喚すると支援射撃を始める。
「喰らえ!」
澪鵺は魔女の元へ辿り着くと、周囲の使い魔をその2本の剣で斬り伏せる。
そこに
「吹き飛びな!紅蓮襲撃!!」
ルークの炎を纏った蹴りが魔女に直撃し、魔女は地面めがけて落下していく。
「うおりゃぁぁぁぁぁ!」
さやかも負けじとその後を追い、落下する魔女に追撃を与えて地面に叩きつける。
だが、魔女はまだ倒れる気配はない。
「し、しぶといわね…」
「なら、俺が本物の『魔法』ってやつを見せてやろう。まぁ、俺のは魔術だがな」
着地した澪鵺はニヤリと笑うと自分の足元に魔法陣を展開する。
その魔法陣は蒼く輝き、美しいとも思えた。
「蒼き雷光の三叉槍よ、降り落ちろ!」
そう詠唱すると魔女の真下に澪鵺の物と同じ魔法陣が展開する。

そして

「――――雷光の三叉槍（ライトニングトライデント）!!」

詠唱が終わると同時に魔女の上空に現れた雷の槍が魔女に突き刺さり、周囲に電撃を放つ。

「俺だって…!」

自分も使えるとばかりにルークも詠唱を始める。

だが、ルークのそれは燃えるような赤いもので、譜陣と呼ばれている。

これは属性によって色が変化するらしく、これは赤。

つまり火属性だ。

「全てを灰燼と化せ!」

詠唱を終え、譜術が発動する。

「――――エクスプロード!」

発動と同時に巨大な火炎球が魔女めがけて落下し、爆風を広げていく。

それはまどかから見てもそうだが、さやかやマミから見ても凄まじいものだった。

「うっひゃあ…2人共凄いなぁ…あんなの喰らったらあたし達じゃただじゃ済まないだろうね…」

「さ、そろそろ決めましょ」

さやかが引きつった表情で言った言葉に「そうね」と肯定し、マミは魔女にトドメを刺そうと巨大な銃を構える。
だが、
「残念だけど今回はマミさんの出番はないよ！」
さやかが叫んで高く飛び上がる。
そのまま剣を構えて急速落下し、
「これで…トドメだぁぁぁぁぁぁ！」
渾身の一撃を叩き込み、魔女を撃破する。
「いえーい！やったぁぁ！」
さやかの勝利の雄叫びと同時に魔女を失った結界は形を崩し、消滅していく。
元にもどった景色にはたくさんの人が倒れていた。
魔女の呪いを受けた人達だろう。
その中には仁美の姿も見えた。
「いやー、ごめんごめん。危機一髪ってとこだったね」
「さやかちゃん…その格好…」
まどかがさやかに近寄り、その騎士のような姿を見る。
その表情は複雑なものだった。

「魔法少女になったのね」
「うん。でも、初めてにしては上手くやったでしょ？あたし」
「確かにね。おかげで私の出番がほとんどなかったわ」
さやかにマミは肯定し、ムスッとした表情になる。
自分の出番が少なかったのが少し不満だったようだ。
だが、さやかが魔法少女になってくれたのは嬉しかったようで手を差し伸べる。
「ありがとう。これから一緒に頑張っていきましょう」
「こちらこそ」
さやかはそれに応え、握手を交わす。
そして、澪鵺の方を向き
「そういえば澪鵺さんの武器ってライフルだけじゃないんだね」
彼が手に持つ2本の剣を見て言う。
それはさやかの持つ剣とは全く違う姿をしている。
「あー、これが俺の武器の本来の姿なんだ」
「本来の姿？」
「まぁ、次の魔女退治の時に見せてやるよ」
マミに剣を見せて笑ってみせる。

すると
「……！」
マミは外に何者かの気配を感じ、身構える。
そこには
「ほむらちゃん…」
そう、暁美ほむらが立っていたのだ。
「あなたは…」
彼女は魔法少女となったさやかを睨みつける。
「ふん…遅かったじゃない。転校生」
さやかも剣を構えてほむらを睨む。
まさに一触即発という空気だ。
「くっ…」
だが、ほむらは戦う気はないのか。それとも４対１だと不利と感じたのか何も言わずにその場から姿を消す。

杏子Ｓｉｄｅ

「へぇ…イレギュラーねえ」
街の鉄塔に座り、赤い髪の少女、佐倉杏子は手に持ったリンゴを囓る。
「そう。しかも他に２人もいる。どうやらそれぞれ別の世界から来たようなんだ」
「ははっ、なんだそれ。どうせ大した事ないんだろ？なら…」
キュゥべえの言葉に笑い、さらにリンゴを一口囓ると
「そいつらをぶっ潰したらいいんだろ？」
そう笑うのだった――――――

第５話　赤の魔法少女

さやかＳｉｄｅ

「さやかちゃんどうして魔法少女に…」

魔女との戦いの後、マミの家に集まっていた。

そして、まどかは魔法少女になった理由をさやかに聞く。

「心境の変化ってやつ？私もやっぱり叶えたい願いがあったの」

「上条くんのこと？」

「うん。先生に今の医学じゃ治せないって言われたらしくて…。だから、あたしはキュゥべえに頼んだの『恭介の腕を治してほしい』って」

「ちなみに、その人は美樹さんの何なのかしら？」

「その…幼馴染みです」

「自分ではなく、幼馴染みの為に願いを使ったのね」

「……」

さやかは何も言えず、黙ってしまう。

「一緒に戦ってくれる人が増えるのは嬉しいけど、他人の為に願いを使って魔法少女になるなんて……」
「マミさん…そんな言い方…。美樹さんにとって上条くんは大事な幼馴染みなんです…」
見かねたまどかがさやかのフォローをする。
さやかにとって恭介がどんな存在かまどかは知っていたからだ。
「そうね…ごめんなさい美樹さん」
「き、気にしないでくださいよ。あたしが勝手に決めた事だから。それに…恭介が喜ぶなら私も嬉しいし…」
「とにかく、明日からはさやかも魔女退治に参加だな」
ぎこちなくなった空気を変えようとルークがニッと笑い、さやかの肩を叩く。
「そうね。明日からよろしくね?美樹さん」
「はい!」

そして、次の日の夕方
「さやか、どうして屋上なんかに…」
「いいから、いいから」
エレベーターの中でさやかは恭介に笑ってみせる。
屋上に着くと…
「父さん…」
恭介の両親、担当の医師や看護師の人たちが屋上に集まっていた。
「処分してくれと言われていたが、どうしても処分出来なくてな…」
恭介の父親は手に持った箱を恭介に見せてみせる。
その箱の中にはいつも愛用していたバイオリンが入っていた。
「さあ、引いてごらん」
恐る恐るバイオリンを受けとると恭介はバイオリンを弾く。
そして、一曲弾き終わると全員が拍手をした。
（後悔なんてない。私、最高に幸せだよ）
さやかはその姿に満足していた。
魔法少女になったことに一切の後悔はないと。

杏子Ｓｉｄｅ

「あいつが新しい魔法少女？」

赤い髪をポニーテールにした少女、佐倉杏子は展望台の双眼鏡で病院の屋上を見ていた。

「本当に行くのかい？」

「新米だろ？楽勝だって」

「昨日も言ったけど、この街にはイレギュラーが３人もいる。しかもそのうちの２人はかなり戦闘に慣れてる。ケンカをふっかけるのはオススメしないよ」

「だからどうしたってんだよ？ぶっ潰せばいいだけだろ」

「そうか…なら、止めはしないよ」

キュゥべえのその言葉を聞き、杏子は展望台を後にする――――

澪鵺Ｓｉｄｅ

その夜、澪鵺達は魔女退治の為にパトロールを行っていた。
先頭ではマミがソウルジェムを手に持って歩いている。
その横では澪鵺が何かの端末を見ていた。
「なぁ、澪鵺。何見てんだ？」
最後尾を歩くルークが端末を見て聞く。
「これか？何度か魔女と戦っているうちに魔女に一定の反応があることがわかってな。それを受信してこのマップに表示出来るようにしたんだ」
そう答えて澪鵺は手に持っていた端末をまどかに渡す。
それを彼女はルークにも見えるように持って端末の画面を見る。
その画面には周囲のマップが表示されていた。
だが、何の反応もない。
「これ、どういう原理でマップを表示してるの？こういうのってＧＰＳとかの電波を受信しないと見れないんじゃ」
さやかは当然の疑問を口にする。

その質問に澪鵺は「あー…」と少し考え
「元々は俺の組織の専用ＧＰＳを使っていたんだが、それがこっちにはないからな。だから予備機能として備わっていた電波を使ったレーダーとしての機能を使っているんだ」
そう答えて「最初はＮｏｔ　Ｄａｔｅと表示されていた」とも説明する。
すると
「何か赤い点が出たよ」
「あ、ほんとだ」
まどかに言われ、さやかも端末を覗き込むと確かに赤い点が表示されていた
「少し貸してくれ」
「あ、はい」
まどかから端末を受け取り、澪鵺も確認する。
自分の仮説が正しければ、これは魔女か使い魔の反応だ。
「マミ」
「ええ…」
マミの持つソウルジェムを見れば激しく点滅していた。
まさにその通りだ。

「ここね」
路地裏を進むと周りの景色が変化し、魔女の結界になる。
「いた！」
使い魔を見つけるとさやかは素早く魔法少女に変身する。
そのままマントに隠れて立ち上がると自分の周囲にサーベルのような形状の剣を召喚していた。
恐らく、マミの真似をしたのだろう。その剣を使い魔めがけて投擲するが、使い魔は全ての剣を避けて逃げようとする。
そんな使い魔をさやかが見逃す訳もなく
「逃がすか！」
そしてもう一度剣を投げる。
だが、その剣は槍で防がれ、地面に突き刺さった。
「ちょっとちょっと、何やってんのさ。あんた達」
結界が消えると自身の身長を軽く越える槍を持った赤い服を着た魔法少女が目の前に現れる。
その服はまるで神父服のようだ。
「逃げちゃう！」

まどかの叫びを聞いてさやかは追いかけようするが、槍を首に突き付けられて立ち止まってしまう。
「見てわかんないの？あれ、魔女じゃなくて使い魔だよ？グリーフシードを持ってる訳ないじゃん」
「だって、あれ放っておいたら誰かが殺されるのよ!?」
さやか言うことなどお構いなく、赤い魔法少女は懐から鯛焼きを取り出すとそれを囓る。
「だからさ…4、5人ばかり喰って魔女になるのを待てっての。そしたらちゃんとグリーフシードも孕むんだからさ」
そう言い、彼女は槍を回転させ、自分の横に立てる。
「あんた、卵を生む前の鶏シメてどうすんのさ？」
「魔女に襲われる人達を、あんた見殺しにするって言うの!?」
「あんたさ、何か大元から勘違いしてんじゃない？食物連鎖は知って――」
「いつ私がそんな事を教えたかしら？佐倉さん？」
後ろからマミが近寄り、彼女を見る。
マミの声を聞くと赤い魔法少女は少し驚いた表情をした。
どうやら知り合いのようだ。

「マミ…」
「マミさん…知り合いなの？」
「ええ、彼女が魔法少女になりたての頃に組んでたパートナー、佐倉杏子さんよ」
マミは彼女の事をそう紹介し、赤い魔法少女、佐倉杏子は澪鵺とルークを見る。
「へぇ…新しい仲間ってか？あたしは佐倉杏子。見ての通り魔法少女だ」
「俺は神崎澪鵺」
「ルーク・フォン・ファブレだ」
「魔法少女でもないのに魔女を倒したらしいじゃないか？」
「だからどうした」
澪鵺は表情を変える事なく杏子を見る。
「魔法少女じゃないのにどうして魔女退治なんかするんだ？あんたらが魔女を倒したところで、あんたらには何のメリットもないだろ。もしかして、人助けだとか正義だの言うんじゃないだろうな？」
「うるさい！」
誰かを助ける為に魔法少女になったさやかは杏子の言葉に怒りを覚えて怒鳴り、杏子を睨みつける。
「なんだ？あんたは、やれ人助けだの正義だの、おちゃらけた冗談かますためにあいつと

契約したって言うのか？」
「だから何だって言うのよ！」
剣を構えて杏子に接近して斬撃を放つ。
だが、杏子もそれを防ぎ、鍔迫り合いとなる。
「ぐ…！」
「ちょっとさ、やめてくんない？」
力の差だろう。さやかが全力で剣を押さえつけているのに対し、杏子は呆れた表情で槍を立てているだけだ。
「遊び半分で首突っ込まれるのってさ、ほんとムカつくんだわ」
杏子は槍を回転させ、多節棍に変化させ、さやかを吹き飛ばす。
「ぐ…ぁ…っ…」
吹き飛ばされたさやかは背中を強打し、息が詰まる。
「さやかちゃん！」
「待てって、今近付くのは危ない！」
まどかはさやかに近寄ろうとするが、ルークに止められてしまう。
「フン…トーシロが…ちったぁ頭冷やせっての」
「く…ぅ…」

「おっかしいなぁ？全治３ヶ月ってくらいには、かましてやったはずなんだけど？」
杏子は立ち去ろうとするが、さやかが立ち上がった事に気付き、足を止める。
「さやかちゃん…平気なの？」
「さやかは癒しの力を契約にして魔法少女になったからね。ダメージに対する回復力は人一倍だ」
まどかは心配そうにさやかを見つめるが、いつの間にか肩に乗っていたキュゥべえが説明する。
その言葉通り、体中の傷が一瞬で治っていく。
「誰が…あんたなんかに…！」
「うぜえ…！うぜえっ！つーか何？口の利き方がなってないよねぇ？先輩に向かってさ」
「黙れぇ！」
そしてお互いに武器を構え直し、再びぶつかり合おうとする。だが――――
「そこまでだ」

間に澪鵺が割って入り、戦闘を止める。
「なっ…澪鵺さん!?邪魔しないで！こいつはあたしが！」
「少し頭を冷やせ。今のお前では奴には勝てない」
「そんなこと…っ！」
「なら、さっきの戦いは何だ」
「くっ…」
澪鵺に痛いところを突かれてさやかは言葉を失う。
彼の言うとおり、彼女はほとんど防戦一方だった。
「マミ。さやか達を連れて使い魔を追え」
彼がそう言うと両手の指輪が光を放つ。
光が消える頃には澪鵺は黒い衣装に身を包み、両手にはあの剣を持っていた。
「ここは俺に任せろ」
「でも…」
彼女の強さを知るマミは心配そうに、澪鵺を見るが
「マミ、お前の武器は銃だ。接近戦に向いてない。それにさやかもまだ魔法少女になったばかりだ。ここは大人しく大人の言うことを聞いておけ。ルーク、お前もマミ達と一緒に使い魔を」

彼はそう言う。
「…わかったわ」
「…ああ」
的確な指示を受け、マミとルークは頷き、さやかを連れて走る。
だが、まどかだけはそれでも心配そうに、澪鵺を見つめていた。
「俺は大丈夫だ。戦いのプロだぞ？行け！」
「まどか！」
「う、うん！」
澪鵺にそう言われたまどかはマミ達の背中を追って走る。
その背中を澪鵺は見送ると、杏子に向き直った。
「あたしとやるってのか？」
「子供相手に剣を向けるのはあまり好きじゃないが、仕方ない」
「何だよ…マジでうぜえっ！」
余裕綽々な澪鵺に杏子は怒りを剥き出しにして突っ込んでいくのだった――――

第6話　対決

「なんだ、その程度か？」
挑発するように澪鵺は杏子の強力な突きを左手に握った剣で軽く弾いてみせる。
「余裕ぶっこきやがって…そういうの、マジうぜえんだよ！」
「甘いな」
「くそっ！くそっ！」
「……」

ギンッ――ギンッ――――

「ぐっ…」
剣と槍がぶつかり合う度に火花が散り、甲高い金属音を響かせる。
そうして何度も打ち合うが、杏子の振るう槍が防がれ、弾かれた。

それでも、彼に勝とうと意地になっている杏子は槍を構える。
澪鵺はそんな彼女に昔の自分を思い出す。
自分も正義や人助けというものが嫌いな時期があった。
彼女のそういうところが自分と重なって見えたのだ。
だから、さやかの代わりに杏子の相手を引き受けた。
そして、戦ってみて分かったが戦い方も自分にそっくりだ。
「これでも…っ！」
「――――遅い！」
杏子の持つ槍の柄に鎖が現れ、彼女はそれを振るう。
だが、澪鵺はバックステップで躱す。
「…仕込み多節棍か」
柄がいくつにも分かれた槍を見て澪鵺は呟く。
多節棍とは柄を分割して鎖で繋いだものだ。伸縮性に優れ、ただでさえ長いリーチを誇る槍のリーチを更に伸ばす。
「理解が早くて助かる。これでも喰らいな！」
杏子は澪鵺の右手に持った剣に向けて多節棍を振るい、剣に巻き付かせる。
「チッ…」

「さて、どうする？」
「なら…少し本気を出そう」
「なに…？」
澪鵺は左手に握る剣を空中に向かって投げ、右手の剣を力任せに引っ張り、杏子を宙に浮かせる。
「なっ…!?」
杏子は体勢を立て直そうとするが、上空からいくつもの光の弾丸が降り注ぎ、彼女を襲う。
杏子は槍を元に戻し、回転させて弾丸を弾いて着地する。
そして
「…なにしたってんだよ」
澪鵺を睨みつけて槍を構える。
さっきまで銃のようなものは持っていなかったはずだ。
「俺の武器の機能を少し見せただけだ」
そう言った彼の周囲に黒いライフルのようなものが展開していた。
その数は左右に７基ずつで計１４基。
それの全ての銃口が杏子を狙っている。

「こいつはライフルビット。さっきの剣、エターナル・ヴァリアントのもう一つの姿だ」
「そいつがさっきの剣だって言うのかよ」
「ああ、その通りだ。それにこいつも、こんなことが出来る」
彼女の目の前で澪鵺が右手に握る剣が輝き、大型のハンドガンへと変化し、彼はそれを杏子に向けて撃つ。
「っ…！」
連射速度はないが、一撃一撃が重く、防ぐ度に杏子は後ろに押されていた。
そこに澪鵺は素早くライフルビットと手に持った銃を元の剣に戻して一気に距離を詰める。
「…動くな。この剣は少し特殊でな。もし少しでもこの刃に触れればその首が吹き飛ぶ」
「そいつは反則だろ…」
槍を弾かれ、左手に握ったエターナル・ヴァリアントと呼ばれる剣を喉元に突きつけられた杏子は引きつった笑みを浮かべる。
「これ以上戦う理由はない。退け」
「情けのつもりかよ」
「まだ死ぬのは嫌だろう」

「…そりゃそうだ」
杏子は槍を下ろし、抵抗の意志が無いことを示してみせる。
それを見て、これ以上は抵抗しないと判断した彼は剣を下ろす。
「次は負けないからな！」
そう彼女はいい残し、壁を蹴って建物を上っていった。
（…次があれば、だがな）
そして澪鵺は彼女の姿が見えなくなることを確認すると路地の奥に向かって声をかける。
「いるんだろう？出て来たらどうだ」
「気付いていたのね」
そう言って路地の奥から姿を見せたのは
「何のつもりだ。暁美ほむら」
そう、ほむらだった。
「あなたには関係ない事よ」
それだけ言い残して彼女は立ち去ろうとする。
だが
「待て。お前には聞きたい事がある」

「…何かしら」
　呼び止める澪鵺に振り向きもせず、彼女は横目で彼を見る。
「魔女、そして魔法少女についてだ」
「それこそ、あなたには関係ない事よ」
「その正体を知っていると言えば？」
「……！」
　魔法少女と魔女の正体を知っているという澪鵺に彼女は少し驚いた表情を見せる。
　それを見た澪鵺は口を開く。
「色々と気になる点があってな。グリーフシード、そしてソウルジェムだ」
　彼は魔法少女の持つソウルジェムと魔女の卵と言われるグリーフシードの名を出し、こう言う。
「あれはどちらも本質は同じ物だろう？」
　グリーフシードとソウルジェムは同じ物だと彼は言ったのだ。
　そしてそのまま続ける。
「不思議に思ったんだ。何故、グリーフシードに穢れを移さなければならないのか。そして、これは俺の仮説だが、ソウルジェムは使い続ければ穢れが溜まり、グリーフシードに穢れを移さなければその穢れは限界に達する。そして、ソウルジェムの穢れが限界

に達すればグリーフシードへと変化する。そしてそのグリーフシードに穢れが一定以上溜まれば魔女が孵化する」

彼は自分の立てた仮説を話した。

仮説と言った通り、確信はない。だが、今までの事を見てきて彼はそうだと感じていた。そして、この仮説が間違いであってほしいとも。

ソウルジェムに穢れが溜まれば、やがて魔法少女は魔女へと変化するのではないか。もし、そうならばマミやさやか達もいずれば魔女へとなってしまう。

「違うか?」

「それをどこで」

「いいから答えろ」

ほむらはその事をどこで知ったのかと聞くが、澪鵺に答える気はない。

ただここで知りたいのはその仮説がイエスかノーかだ。

「…ここでは話せない。彼女達が戻ってくる」

だが、彼女はそう言ってその場から姿を消してしまう。

「待て!」

澪鵺は追いかけようとするが、すでに彼女の姿はなかった。

だが、彼女の反応を見るに仮説は間違っていないと考えても良さそうだ。

「澪鵺さん！」
「あいつは!?」
後ろからまどか達が駆け寄り、さやかは周囲を確認する。
どうやら、ほむらの事には気付いていないようだ。
「撃退した。それよりも使い魔は？」
澪鵺は杏子を撃退した事を伝え、使い魔の事を聞く。
「使い魔の方は心配いらないわ」
「倒したのか」
「当然よ」
使い魔は倒したと言ってマミは軽くウインクしてみせる。
「さて、今日はここまでにしよう」
空を見れば日は傾き始めていた。
これ以上は遅くなりそうな為、今日の魔女退治は終わりとする。

澪鵺Ｓｉｄｅ

「で、話ってなんだ？」

その日の晩、ルークは澪鵺の部屋に呼ばれていた。

何か大事な話があるという。

「今日、あの後暁美ほむらに会った」

「あいつに会ったのか!?」

「…声が大きい。ママに聞かれないようにしろ」

「ご、ごめん」

ほむらに会ったと聞き、つい大きな声を出してしまい口を塞がれる。

マミとほむらの関係は良くないのであまり聞かれたくない。

「それで…どうしたんだ？」

「魔法少女、そして魔女の事について聞いてきた」

「何か分かったのか？」

「やはり…俺の仮説は正しかったようだ」

「あいつがそう言ったのか？」

「いや…ただ、あいつの反応を見る限り、間違ってはいないだろう」

「そうか…」

ルークには自分の立てた仮説を話していた。
ソウルジェムに穢れが溜まればいずれ魔法少女は魔女になってしまうと。
その仮説がほぼ正しいと言われ、ルークは表情を曇らせる。
今戦ってる仲間がいずれは敵になるかもしれないと思えば当然の事だろうが。
「それで…もし、もしだぞ？」
そう言い、ルークは顔を上げる。
「もし…マミやさやかが魔女になったら助けられないのかな…」
もし、彼女達が魔女になったらと思うと不安になり、ルークは聞くが、澪鵺は首を振る。
「それは分からん。何かしら手はあるかもしれないが、今は情報が少なすぎる。もし、暁美ほむらを仲間に引き入れることが出来たら何か分かるかもしれないが」
「そう簡単にいけるのか？」
「難しいだろうな。だが、何もしなければ何も変わらん」
「そう、だよな…」
澪鵺の答えにルークはまた顔を伏せてしまう。
だが、すぐに顔を上げる。
「よし、今は俺達に出来る事をやっていこう」

そう言って自分の部屋へと戻って行くのだった。

ルークＳｉｄｅ

（魔法少女が魔女に…）

ルークはベッドに転がってマミ達の事を思い浮かべていた。

いつかは彼女達が魔女になるかもしれないと考えると何とも言えない不安がこみ上げてくる。

（その事…あいつらは知らないんだろうな）

さやかやマミがその事を知らずに戦っているとなると胸が苦しくなる。

ほむらや杏子もだ。敵対しているとはいえ、自分より年下の女の子が戦って死ぬというのはあまりにも残酷すぎる。

そんな事を考えていると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「少しいいかしら？」

「マミか？入っていいぜ」

ルークはベッドから降りる。
「ごめんなさいね。疲れているのに」
「いいんだって。何か用か？」
「この間のお礼が言いたくて」
「お礼？」
何の事だろうルークは少し考えるが、初めてマミを助けた時の事を思い出す。そして、「ああ」と納得する。
「澪鵺さんには言ってたんだけど、あなたにはまだだったから」
「いいよ。それに、これ以上目の前で人が死ぬところを見たくないんだ」
ルークは俯き、自分の両手を見つめる。
今までの記憶がフラッシュバックし、その両手は血に塗れているように見えた。
「…１万人」
「え？」
「俺が今までにこの手で殺してきた人の数だ」
「え……!?」
マミはその言葉に驚愕し、言葉を失う。
こんな優しい人がどうして、と。

「俺の話、聞いてくれるか？」
ルークはマミが頷くのを確認すると元の世界での事を話した。
自分がレプリカであること、アクゼリュスのこと、世界に広がった瘴気を中和する為に奪った命の事、そして旅で起きた事の全てを。

「…長くなっちまったな」
「いいえ。あなたの事を知れて嬉しかったわ。ありがとう。ルークさん」
「あ…その、ルークさんってのやめてくれないか？呼び捨てでいいからさ」
「じゃあ…ルーク。これでいいかしら？」
「ああ、ありがとう。マミ」
「…それじゃあ、私の事も聞いてくれるかしら？」
「俺ばかり話してるってのもあれだからな。聞くよ」
マミはその言葉に微笑み、口を開く。
「私は、生きたくて契約したの」
「生きたくて？」

ルークはその言葉の意味が分からずに首を傾げる。
「昔、交通事故に遭ったのよ。私も含めて誰も助からない状態だった。そこにキュウべぇがやって来た。考える暇なんてなかったわ」
「そうだったのか…」
「それから、私はパートナーを見つけて一緒に戦ってきた。それが佐倉杏子さん。けどお互いの考えが合わなくて別れたの。それからはずっと１人」
「たった１人で戦ってきたのか…」
「ふふ。バカよね。鹿目さん達と出会って、浮かれてたのかもしれない。もう１人で戦う必要はないのかもしれないって。だから、あの時油断したの。もし、あなた達が来なければ、私は死んでた。いいえ、鹿目さんや美樹さんも」
ルークにはその気持ちが痛い程分かった。
孤独な戦いほど辛いものはない。
彼女は中学生だ。自分よりも年下なのに、誰も知らないところでたった独りで戦っていたんだ。
彼女にとって、それはとても苦しいものだっただろう。
だが
「でも、今は俺達がいる」

そう。今は仲間がいる。助け合える仲間が。
その言葉にマミは顔を上げ、ルークを見る。
「俺も澪鵺も。まどかやさやかもいる！だから、一緒に戦っていこう！」
「ルーク…」
マミの瞳に涙が溢れる。
ずっと話せなかった気持ちを話せて楽になったのだろう。
「私…もう、1人じゃないのよね…」
ひっく、ひっく、と涙をこぼすマミをルークは抱きしめた。
マミにルークの温もりが伝わり、更に涙をこぼす。
「ありがとう…ルーク…」
うわぁぁぁぁぁん、と泣きじゃくるマミにルークはずっとついていた。
朝になるまで、ずっと――――――

第７話　真実

「本当に俺で良かったのか」
「だって、ルークはいないし、澪鵺さんしか教えてくれる人いないじゃん」
澪鵺とさやか、まどかはこの間魔女と戦った廃工場に来ていた。
「それに、あいつに負けたままじゃ嫌だし…強くならなきゃ」
昨日、杏子に負けた事がよほど悔しいのか俯いて拳を握り締める。
「さやかちゃん…」
そんなさやかを見て、まどかは心配そうに見るが、彼女は澪鵺を見る。
「澪鵺さん強いし、あたしも澪鵺さんみたいになりたいなって思うんだ！」
「…わかった。そこまで言うのなら面倒を見てやる」
「やった！」
澪鵺に面倒を見てもらえる事になり、喜ぶさやかはさっそく魔法少女に変身しようとソウルジェムを構える。
が
「待て待て、こんなところで剣を振り回してるところを見られるとマズい」

そう澪鵺に止められてしまう。
「じゃあどうすんのよ」
「こいつを使え」
澪鵺は転がっていた鉄パイプを2本掴むと1本をさやかに渡す。
「これ、鉄パイプ？」
「まずはそれで打ち込んでこい」
「…わかった」
さやかは鉄パイプを構えて澪鵺を見る。
重さは普段使ってる剣より少し重いくらいか。
だが、特訓に使うにはもってこいだ。
「死ぬ気で来い！」
その言葉を合図にさやかは澪鵺へ向かって走っていくのだった。

――――――

「だぁぁぁぁっ！つかれたー！」
「お疲れ様、さやかちゃん」
「ありがと、まどか」
２０分程打ち込むと、疲れたさやかは鉄パイプを放り出して地面に転がる。
そんな彼女にまどかはペットボトルの水を差し出し、それをさやかは受け取って半分ほどを一気に飲み干す。
澪鵺もまどかから水を受けとると少し飲む。
「ふーっ…どうだった？」
息を整え、体を起こすと隣に座った澪鵺を見て自分の評価を聞く。
「剣士としてはまだまだだな。無駄な動きが多すぎる」
「えー!?」
「だが、いい線は行っている。このまま続ければすぐ強くなるさ」
「ホントに!?」
「ああ。さやかはどちらかと言えば一撃の威力より手数の多さのスピードアタッカータ

イプだ。もしかしたら俺のように双剣で戦ってみるのもいいかもしれないな」
澪鵺はそう言って両手に填めた黒い指輪を見せる。
彼の剣はレゾナンツ・ヴァリアントと呼ばれる2本一対の剣で左手の剣がエターナル・ヴァリアント、右手の剣がレヴァンシュベルツ・アクセリオンという剣だと聞いた。
その2本の剣を自在に操る姿はさやかの憧れだ。もちろんルークもだが。
「暗くなってきたな。そろそろ帰るとするか」
澪鵺に言われ、空を見るとかなり暗くなってきていた。
「今日はもう帰るぞ。続きはまた明日にでもやろう」
「あ…じゃあ、澪鵺さんは先に帰ってて。あたしは寄るところがあるから」
「そうか?なら途中まで送ろう」
「ありがとう。澪鵺さん」
「こんな場所で女の子を放って帰るわけにはいかないからな」

「ただいま」
「おかえり。遅かったじゃないか」
「さやかの特訓に付き合っていたんだ」
家に帰るとルークが廊下に立っていた。
澪鵺はさやかの特訓に付き合っていた事と、さやかとまどかとは途中で別れて帰ってきた事を伝えてリビングに入る。
「あなたから見て、美樹さんはどうかしら？」
夕食の準備をしていたマミが澪鵺に聞く。
昨日の事があり、マミも心配だったようだ。
「元気にはやっている。確かに、まだまだ素人だが特訓さえしてやれば立派な魔法剣士になれるだろう」
「よかったわ。美樹さんの事お願いね」
「任せておけ。ルークも、たまには相手をしてやってくれ」
「任せておけって」
ルークは笑って胸を叩いてみせる。
すると、マミの携帯が鳴り響く。
「鹿目さんからだわ。どうしたのかしら？」

そう言ってマミは電話に出ると、まどかの慌てた声が聞こえる。
だが、内容までは聞こえない。
「なんですって!?今すぐ行くわ!」
澪鵺とルークは顔を見合わせてどうしたのだろうかと首を傾げる。
だが、間違いなく只事ではなさそうだ。
通話を終え、携帯をポケットにしまい込んだマミは2人を見て
「佐倉さんが美樹さんに決闘を挑んだらしいわ」
そう言った。
「な…!?」
「今すぐ止めに行くぞ!」
マミの言葉に驚いた2人は急いで玄関へと向かう。
「あいつらは今どこに!」
「ここからそう遠くはないわ。でも、間に合うかどうか…」
マンションの通路を駆け抜けながら澪鵺は聞く。
だが、間に合うか分からないと俯いてしまう。
(くそっ…なら…)
「こいつに乗れ!」

そう言った澪鵺の左手の指輪が輝き、黒い箱のようなものが幾つか出現する。
それをいくつか組み合わせてホバーボードのようなものを２つ作ってみせる。
「これは？」
「説明は後だ！振り落とされるなよ！」
澪鵺は２人をそれぞれのホバーボードに乗せて箱の後ろを蹴る。
すると、安全装置のようなもので足が固定された。
「澪鵺さんは!?」
マミはそう聞くが、澪鵺は首を振る。
すると
「俺はこいつがある」
そう言い、背中に蒼い粒子を収束させていく。
そして、
「粒子の翼（エナジー・ウィング）」
彼の詠唱に応えるように背中に蒼い光の翼が出現した。
その姿はまるで天使のようだ。
「そんな事まで出来るのかよ!?」
「さっさと行くぞ！間に合わなかったら元も子もない」

そう澪鵺は言い、さやかの元へと急ぐのであった。

さやかＳｉｄｅ

「ここなら遠慮はいらないよね。さぁ、派手にやろうじゃない！」

杏子は魔法少女に変身し、さやかもソウルジェムを取り出す。

そして魔法少女に変身しようとするが、後ろから聞こえた声に振り返る。

「待って、さやかちゃん！」

「邪魔しないで！そもそもまどかは関係ないんだから！」

途中で無理矢理別れたのだが、追ってきた様子のまどかにさやかは怒鳴るように言う。

だが、今回ばかりはまどかも本気で止めようと必死に反論する。

「ダメだよ！こんなの絶対おかしいよ！」

「ふん、ウザイ奴にはウザイ仲間がいるもんだねぇ」

２人の様子を見て杏子は口元に笑みを浮かべ、槍を構えて襲いかかろうとする。だが

…

「じゃあ、あなたの仲間はどうなのかしら」

彼女の後ろにほむらが現れ、さやかと杏子の間に割って入る。

「話が違うわ。美樹さやかには手出ししないと言ったはず」

「あんたの考えは手ぬるすぎるんだよ。あっちはやる気だぜ?」

「なら私が代わり戦う」

「ならこいつを食い終わるまで待ってやる」

杏子は指で口にくわえているお菓子を差し、これを食べ終われば自分も戦うと主張する。

「十分よ」

それにほむらはそれだけの時間があれば十分だと言う。

「…バカにして…!」

魔法少女になりたての自分を侮辱されたと感じたさやかは魔法少女に変身しようとソウルジェムを構える。

「さやかちゃん…ごめん!」

「まどかっ⁉」

まどかはさやかのソウルジェムを奪うと橋の下に捨てようと手を振り上げる。

だが
「ちょっ！待った待った‼」
後ろから走ってきたルークが彼女の手を掴んでそれを阻止する。
「せ、セーフ…間に合った…」
「ルークさん⁉」
「俺たちもいるぞ」
声に振り向くと澪鵺、マミもさやかの後ろから歩いてきていた。
「間一髪ってとこだな」
「な、何…？どういうこと…」
「酷いなぁ、まどか。君はもう少しで『友達』を投げ捨てるとこだったよ」
「え…？」
どこからか突然キュゥべぇが現れ、まどかに言う。
キュゥべぇの言葉の意味が分からず、彼女は戸惑っている様子だ。
「やはり現れたな。そろそろ説明してもらおうか。この腐れ外道が」
澪鵺はキュゥべぇにライフルを突きつけて睨み付ける。
この場にいるほとんどの者は何が何だか分からず困惑しているだろう、目を丸くして固まっているだけだ。澪鵺、ルーク、そしてほむらを除いて。

「やっぱり気付いていたんだね。神崎澪鵺、そしてルーク・フォン・ファブレ。君たちの想像通りだよ。ソウルジェムは魔法少女の魂そのものだ」
「な、何いってんのよ。わかるように説明しなさいよ！」
　さやかは訳がわからないと戸惑いの表情で叫ぶ。
　それにキュゥべぇは淡々と答える。
「だから、言葉の通りだよ。ソウルジェムは君たち魔法少女の魂そのものなんだ。まさか生身の身体で魔女と戦えなんて言えないよ。だから、魂を抜き取ってソウルジェムに変えるんだ」
「なんだと…」
　杏子はキュゥべぇの言葉を聞き、体を震わせる。
「どうしてその事を先に言わなかったんだ！」
「聞かれなかったからね。むしろ便利じゃないか。ソウルジェムがある限り君たちが死ぬ事はない」
「ふざけるな！あたしたちはてめえに騙されたって事かよ！」
　杏子はキュゥべぇに掴みかかろうとするが、澪鵺に無言で阻止されて立ち止まる。
「君達人間はいつもそうだね。事実を伝えると決まって同じ反応をする。訳がわからないよ」

「貴様にはわかるまい！人間の気持ちなどな！」
「確かに僕は魔女少女について色々と話してないことはあるけど、それを知って君達にとってプラスになるかい？」
キュゥべぇの言葉は知らない方が良いこともあるとあると言いたげだ。
「もし契約したくなったらいつでも声をかけてよ、まど――――」
キュゥべぇは立ち去ろうとするが、言葉は途中で途切れ、彼の身体が吹き飛ぶ。
「れ、澪鵺さん⁉」
そう、澪鵺が手に持ったライフルの引き金を引いたのだ。
無言で引き金を引いた澪鵺に驚き、さやかは声を上げる。
だが、澪鵺は何も答えずほむらを見る。
「お前も何か知っているのだろう。暁美ほむら」
「ほむら…ちゃん…？」
澪鵺とまどかに見つめられ、ほむらは息をついて答える。
「ここでは話せないわ。私の家に来て」

「それで、魔法少女について他に何を知っている」
ほむらに案内され、まどか達はほむらの家に来ていた。
ソファーが並べられ、中心にテーブルが置かれている。部屋自体は白を基調としたものだ。
「いや、単刀直入に聞こう。魔女は魔法少女の成れの果てだな？」
澪鵺は真っ直ぐほむらを見ると魔女の正体について聞く。
それに対しほむらは、それについて聞かれる事を分かっていたようですぐに答える。
「そう、以前にあなたが言っていたように魔女は魔法少女の成れの果て。ソウルジェムに穢れが限界まで溜まれば魔女になるわ」
「…やっぱり」
ほむらの答えにルークは口の中で苦虫を潰したような表情をする。
だが、さやかは澪鵺に対し別の事を聞く。
「ちょっ、待ってよ。澪鵺さんとルークさんはこいつに会ってたの？それに魔女が魔法少女の成れの果てって」
「…お前がそこの佐倉杏子とやり合った時だ。こいつを退けた後にこいつが現れた。そ

の時に聞いただけだ」
「それで、魔女が魔法少女の成れの果てってどういう事だよ。分かるように説明しろっての」
横から杏子が険しい顔で聞く。
よほどキュゥべぇに対して腹を立てたのだろう。ずっとイライラしたままだ。
「さっきも言った通り、魔女はソウルジェムに穢れを限界まで溜め込んで豹変した姿だ。今まで戦って分かっているだろうが、奴等が魔法少女だったときの意識などは残っていないだろう」
「それってつまり、私達もいずれは魔女になると言うことね…」
「穢れが限界まで溜まる前にグリーフシードを使えなければ、そうなるわ」
マミが自分のソウルジェムを見つめて表情を曇らせる。
当然だろう。自分達がいずれあのような化け物になって人を襲うようになると言われたのだ。
「じゃあ、今まであたしたちが倒してきた魔女って」
「元々は私達と同じ魔法少女よ」
「く…」
さやかはその事実を知って何も言えず歯ぎしりをする。

そこに、マミの声が小さく聞こえる。
「…ぬしか……じゃない…」
「マミ？」
「ソウルジェムが魔女を産むなら死ぬしかないじゃない！あなたも！私も！」
マミが魔法少女に変身してほむらをリボンで縛り上げ、マスケット銃を向ける。
そしてその引き金に指をかけ――――
「待てマミッ！」

タアアアアアン――――

銃口から魔弾が放たれる。
だが、それはほむらには当たらず、壁に穴を開けただけだ。
「駄目だ…マミ…！」
見ればルークがマミの腕を掴んで銃口を逸らしていた。
「離して！ソウルジェムを壊して私も――！」

「簡単に死ぬとか言うな！」
「っ…」
「死ねば…何もかも終わりなんだよ…。それに、絶対に俺が…俺達がみんなを魔女になんてさせない！皆を救ってみせる！」
ルークがマミの腕を掴んだまま叫ぶ。
「言ったよな俺…。死ぬのは簡単だ。でも、死ねば悲しむ人がいる。俺はマミや皆が死ぬなんて嫌だ。だから必ず助ける方法を探してみせる…。だから死ぬなんて言うな…」
ルークの手に力が入る。
マミはそんなルークの言葉を黙って聞いていた。
ルークは自分が元の世界で世界を救うために自分を犠牲にしようとしていた。
だが、そんな彼を助けようと仲間達が必死になっていてくれた。だからこそ、誰かが死ぬことで誰かが悲しむことも知っている。そんな彼だからこそ、こういう事が言えたのだろう。
「私達が助かる方法なんて…」
「必ず何かあるはずだ。だから、それを探す。ここにいる皆、誰も魔女になんてさせない！」
「…ルーク」

澪鵺が静かにルークの手に触れる。
その手は震えてマミの腕が少し赤くなっていた。
「あ…ごめん…。マミ、少し付き合ってくれ」
「え、ええ…」
ルークはマミの手を握ると玄関に向かって歩いていく。
マミも少し落ち着いたのか静かにルークに付いていく。
２人の姿が消えるまで、誰もその場から動こうとはしなかった。マミがあれほど取り乱すとは誰も思わなかったのだろう。誰もがその場で立ち尽くしていた。
部屋が静寂に包まれる。

「…少し皆に提案がある」
その静寂を破ったのは澪鵺だ。
真剣な眼差しで彼女達を見ると続ける。
「これから、ここにいる全員で手を組もうと思う」

第８話　絶望を切り開く力

「これから、ここにいる全員で手を組もうと思う」
そう言い放った澪鵺の顔は真剣だ。
だが、さやかは反論する。
「こんな奴らと手を組むって言うの⁉今までさんざんあたし達の邪魔をしてきたって言うのに！」
さやかの言い分はもっともだ。
今まで敵対してきた人間といきなり手を組むと言われても難しいだろう。
だが、それでも澪鵺は続ける。
「さやかの言いたい事は分かる。だが、今ここで俺達が敵対して何の得がある？俺達の敵は同じ魔女、そしてキュゥべぇだ。魔法少女同士が争って何になる」
澪鵺はまどか、さやか、杏子、ほむらを見て言う。
自分達が戦うべき相手は魔法少女ではないと。
敵は魔女、そしてその根元であるキュゥべぇだ。だからこそ、手を組み、共に戦うべきであると。

「魔法少女同士で争っても何も解決はしない。なら、ここは手を組むべきだと俺は思う。もちろんすぐに答えを出せとは言わない」
「…あたしは、少し時間がほしい。頭では分かってるんだ。あたしの戦うべき相手はあんたらじゃないって。でも、すぐには答えられない」
　杏子はそう答えると部屋から出ていく。
「…あんたはどうなのよ、転校生」
「そうね。私は手を組んでもいいと思うわ。ただ、その前にあなた達の事を教えてもらえるかしら――？」

「…ルーク、さっきはごめんなさい」
　ルークとマミはほむらの家を出て外を歩いていた。
　マミはルークの後ろを歩きながら小さく謝る。
「ん…？ああ、いいんだ。わかってくれたなら」
「本当に私達を助けてくれるって言うの？」

「…ああ。俺は誰にも死んでほしくない。マミも、さやかやまどかにも、あの２人にも。そう簡単な事じゃないかもしれない。でも、何か方法はあるはずだ。だから…」

ルークは立ち止まって拳を握る。

そんなルークをマミは後ろから抱き締める。

「ま、マミ⁉」

ルークは驚いたような声を上げるが、マミは離さず、そのまま続ける。

「ありがとう、ルーク。そう言ってくれて。あなたのおかげで私はまだ戦える。あなたを希望として、私は戦うわ」

マミの言葉は優しく、そして確かな覚悟を感じた。

ルークはそんなマミの言葉に安心し、その手に触れ、呟く。

「必ず、俺達がなんとかしてみせるから」

そう、誓うように――――

「…あなた達の事はよく分かったわ。私にあなた達と敵対する理由はない。手を組みま

しょう」
　澪鵺は自分達が別の世界の人間であることをほむらに話した。
　一部黙っていた事はあるが、ほむらはそれを受け入れ、手を組む事を了承してくれた。
「助かる。戦力は少しでも多い方がいいのでな」
「それで、魔法少女を助ける、と彼は言っていたけど。何か策でもあるのかしら」
　ほむらは澪鵺に魔法少女を助ける方法に心当たりがあるか聞くが、澪鵺は首を横に振る。
「それはこれから考える。多少時間はかかるかもしれないが、何もしないよりはいい」
「…そう。わかったわ。何かあれば連絡をちょうだい」
「わかった。よろしく頼む」
　ほむらと連絡先を交換すると澪鵺はまどかとさやかを連れて彼女の家を出ていくのだった――――

　途中でルーク、マミと合流し、さやかとまどかとは別れてルーク達は家に帰って来た。

マミも落ち着いた様子で普段と変わらない。
「さすがに疲れたな」
澪鵺がリビングに座り込むとマミはクスクスと笑う。
「あれだけ怒ればね。正直、あなたが怒るところは初めて見たわ」
彼女にそう指摘されると澪鵺は頬をポリポリと掻くと照れ臭そうに呟く。
「俺もあそこまで怒るつもりはなかったんだ。だが、あいつの顔を見ると怒りがこみ上げてきてな。許せないんだ。あんな風に人の気持ちを踏みにじるような奴」
「優しいのね」
マミは紅茶を用意するとルークの隣に座る。
「別に優しい訳ではないさ。俺は俺の思うように行動してるだけだ」
「まぁ、そういうのもいいんじゃないか？間違った事さえしなかったら」
澪鵺の言葉にルークが紅茶を飲みながら肯定する。
「…そうだな。そうかもしれないな」
「それに、私達魔法少女を助けようとしてくれている。ありがとう」
「仲間、だからな。今はこうして一緒に暮らしている。家族も同然だ」
「家族、か…家族…。そうね、ありがとう」
澪鵺の言った『家族』という単語を繰り返すとマミは微笑んで再び礼を言う。

「やっぱり、優しいわね」
「な、なんだよ…急に」
「ふふ…そう思っただけよ?」
「照れてらー。もしかして慣れてない感じか?」
茶化すようにルークに言われ、澪鵺は何も反論できずに黙り込む。
どうやら図法だと感じたルークは勝ち誇ったように笑う。
「まったく…人をからかうんじゃない。俺は部屋に戻るぞ」
澪鵺は相手などしてられないと言うように部屋に戻っていくのを２人は「おやすみ」と見送るとマミはルークの肩に頭を乗せる。
「マミ?」
「少しだけ、こうしててもいいかしら?」
「いいけど…」
「実はね、やっぱり怖いの。あなた達がいるから大丈夫。頭では分かっていても、いつ自分が魔女になるか分からないって思うと怖くて胸が苦しくなるの」
「マミ…」
当たり前だ。ただでさえ生死を賭けた戦場にいるというのに、魔女に勝ったとしても自分が魔女になるかもしれないのだ。それに、まだ彼女達は中学生だ。大人でも死ぬの

は怖いのに、彼女達にとってその事実はどれだけの負担になるのだろうか、到底わかるわけもない。
だが、ルークは彼女の頭を撫でると噛み締めるように言葉を紡いでいく。
「大丈夫。俺達が絶対に守ってみせる。こんなことしか言えないけど、マミもさやかも、誰1人として欠けさせない」

澪鵺Ｓｉｄｅ
「ふう…」
澪鵺は自分の部屋に戻るとすぐにベッドに転がって息をつく。
（まったく…本当に疲れた）
天井を見つめて頭の中を整理する。
魔法少女はいつか魔女になる可能性がある。そして、それを防ぐ方法は今のところない。
完全にゼロからのスタートだ。
（…魔法少女を魔女にしないためには…）

魔法少女が魔女になるサイクルを思い出す。
ソウルジェムに穢れが溜まれば、魔女になる。
その穢れとは一体何なのか。
『魔力ですよ』
考えていると頭の中で女性の声が響く。
彼はこの声に心当たりがあった。
毎日聞いている声だ。分からない訳がない。
いや、正しくは、こっちの世界に飛ばされる前までは、だ。それでも聞き間違える事などない。
（どういう事だ。エリアル）
澪鵺は声の主をそう呼んだ。
『そうですね…』
エリアルと呼ばれた彼女は少し考える。
答えはすぐに出た。
『一度直接話しましょう』
彼女がそう言うと、澪鵺は何も答えずに目を瞑って意識をエリアルに集中させる。
そして、次に目を開けると、そこは彼の部屋ではなかった。

いや、違う。正しくは澪鵺の身体は部屋にある。
ここは彼とエリアルが共有する精神空間のようなものだ。
「来ましたね」
「それで、さっきのはどういう事だ?·エリアル」
澪鵺の前には緑がかった薄い水色の髪を腰まで伸ばした女性が立っていた。
エリアル・シルヴァ・シルフィード。それが彼女の真名だ。
だが、彼女にはもう1つ名前がある。
シルフ。それが彼女のもう1つの名。そう、彼女は澪鵺が契約している精霊シルフだ。
だからこそ、彼女は澪鵺と精神空間を共有することが出来るのだ。
「そうですね。魔法少女が魔法を使う度に穢れが生じる。簡単に言えば、使って汚れた油のようなものです。魔法少女は私たちと違い、それぞれが持つ魔力は有限。だから戦闘後はグリーフシードを使って魔力を『濾過』するのです。そして、残りかすをグリーフシードに移した魔力は新品同様に戻るというわけです」
エリアルはそこまで話すと少し息をつき、澪鵺の目を真っ直ぐに見る。
「ここまでは、理解できましたか?」
「ああ…だが、どうしてその事を」

澪鵺は当然の事を聞く。
自分の中で見ていたとしても、直接関わってはいないのだ。そこまで分かるわけがない。
「マスター…いえ、澪鵺。精霊を見くびらないでください。こっちの世界に飛ばされて今まで出てこなかった間、何もしていなかった訳ではないのですよ」
エリアル溜め息をついて呆れたような目で澪鵺を見て続ける。
「こちらの世界は私たちの世界のようにC粒子が溢れているわけではない。だから、粒子の塊のような私は自由に動けなかったのです。その間、私はあなたの中で魔法少女達を観察していた。それに私はこのような力の源を分析するのは得意なのです。少し時間はかかりましたが、こちらの世界にも対応でき、今あなたの前にいるのです。実体化はまだ無理ですが、他の精霊だともっと時間はかかりましたよ?」
「わ、わかった。すまなかったな。また会えて嬉しいよ。エリアル」
「…私もです。いずれまたこちらの世界でもあなたの力になりたいと思います。共に肩を並べて戦いたいとも」
エリアルは柔らかな表情で微笑む。
それに澪鵺も「頼む」と答えると彼女は真面目な表情に戻る。
「さて、話を戻しましょう。魔法少女を救う為には、穢れを溜めないようにする必要があ

る。そして、魔法少女の魔力が有限だと言うなら、それを私たちと同じ仕組みに変えてしまえばいいのです」
「というと？」
エリアルの言う意味が分からなかった澪鵺は彼女に聞く。
自分達と同じ仕組みに変えるとはどういう事なのか。
「自分の持つ魔力だけではなく、私たちが使っているC粒子を使えるようにすればいいのです」

彼女の言うC粒子とは、澪鵺が言っていた粒子の事だ。
「だが、そんな事が出来るのか？」
「あなたが今、この世界で能力（スキル）を使えているということは、この世界に粒子が少なからずあるということ、その点では問題ありません」
「それもそうだが、どうやって仕組みを作り替えると言うんだ」
エリアルの言っている事は滅茶苦茶だ。
そう澪鵺は思っていた。だが、エリアルは難しい事ではないと言うように答える。
「絶望を切り開く力があなたにはあります。あなたの能力の本質は闇。あなたが…私たちが魔法少女と契約するのです」